

書評

フランス近世都市研究の一動向

Philip Benedict, ed., *Cities and Social Change
in Early Modern France* (London, Unwin Hyman, 1989)

高澤紀恵

ヨーロッパの近世都市は、長いあいだ中世都市と近代都市研究の狭間に埋もれてきた。Jan de Vries がいみじくも述べたように「伝統的か、近代的か」という二項対立の図式の中では、「中世以降、産業化以前の都市」は、その固有の歴史的な性格を問題とされることはなかったのである (Jan de Vries, *European Urbanization 1500-1800*, Cambridge, 1984, Introduction)。しかし、1970年代より、このような図式に絡めとられることなく、近世という時代の中でその独自性を捉えようとする、あるいは都市を通じてこの時代の特徴を探ろうという研究が相次いで現われてきた。Philip Benedict はそのような潮流を代表する研究者の一人である。彼が編集した『近世フランスの都市と社会変化』 *Cities and Social Change in Early Modern France* (London, Unwin Hyman, 1989) は、四半世紀の蓄積を積んだ近世都市研究の現在の研究水準を見事に示す一冊である。

全体は七章より構成される。対象とする時代は1450年より三世紀を越え、地域も首都パリからディジョン、トゥールーズなど地方の中心都市、さらにはドーフィネの小都市群に及んでいる。寄稿者もアメリカ、フランス、カナダにまたがり、フランス近世都市研究の「前線」を提示しようという編者の意欲がうかがわれる。とはいえ、個々の論文は近世都市についてなんらかの統一像を描くことを意図したものではない。社会的紐帯やト

ポグラフィー、都市・農村関係など幾つか共有される問題は浮かび上がってくるが、あくまで各人の関心を自由に追求したモノグラフィーである。この点を補い現在の研究状況を概観するのが、60ページに及ぶ Benedict の巻頭論文「一六世紀から革命までのフランス諸都市概観」French cities from the Sixteenth century to the Revolution: An overview である。宗教戦争の勃発（1562）とルイ十四世の死去（1715）を分岐点として、この間の都市の展開を三期に分けた彼は、研究成果を巧みに整理し全体の概観を与えてくれる。164の充実した注に加え1960年代以降の都市史の主要文献が Select Bibliography としてまとめられており、今後の研究に必須の論文といえる。

二章以下の個別論文を順次見ていくことにしよう。第二章は、現在のところ16・17世紀パリ研究の第一人者である Robert Descimon の「聖バルテルミーの虐殺前夜のパリ」Paris on the eve of Saint Bartholomew: Taxation, Privilege and Social-geography である。彼が用いた史料は、パリの16の街区のさらに下におかれた154の小街区（十人区）毎に作られた1571年の徴税簿である。ここに現われた1600名の氏名と課税額に、公証人文書を用いて彼らの職業を補うことで、貴重な基礎データが作成される。彼はここから、職業や課税額の多寡をメルクマールとして彼らの居住分布をパリの地図の上に描きだした。この数葉の地図が教えるところはきわめて大きい。まず、貧富の差による分布図は、多くの中世都市にみられるように中心部に富裕者が、周辺部に貧しいものが住むという単純な構図ではなく、富裕層が集中する複数の核があることを明らかにする。しかも職種毎に立ちいって検討してみると、幾つかの職種を除いて職人層がむしろ広く分散して住むのに対して、宮廷貴族、司法、財務官僚、古くからの豊かな商人、弁護士ら専門職などの富裕層は、グループ毎に明確な集住傾向を示している。司法官僚と弁護士のように、居住パターンに相関性が認められるグループもある。十六世紀の後半にはすでに、富裕層の内部では「住み分け」が進展していたことがわかっていく。

それは、とくに伝統的な商業エリートと台頭著しい司法、財務の国王官僚の間に、深い溝を穿つことになる。広がりはじめた両者の社会的距離は、居住空間の上でも確認されたのである。Descimon はこれを、職人、商人が混然と密集する「古きパリ」と官僚エリートがゆったり館を構える市壁周辺の「新しきパリ」の二つのパリと表現した。両者の対立がこの後リーグ期、フロンド期の抗争を貫いていくというのが、彼のこれまでの研究の主要モチーフであった。それゆえこの論文も、それらの成果をトポグラフィの面から補強したという一面をもつ。しかし、この論文の価値は、それだけに留まらない。これまでの研究がパリの16の街区のレベルに留まっていたのに対し、その下の154の小街区にはじめて踏み込み複雑な居住パターンを折出したことによって、小街区に、つまりはその内部の近隣関係に多様な個性があることを具体的に検証した意味は大きい。というのも、パリの市政は、小街区や街区の地域単位の編成をとっているため、「住み分け」による地域内部の近隣関係の変質は、民兵隊長や街区長などそこでの名望家のヘゲモニーに変化をもたらさずにはおかないからである。それは当然、地域代表の集まる市政の場へと反映する。Descimon は、居住空間の分析を通して、末端の社会的紐帯の再編と市政を舞台とした権力構造の変容の二つをつなぐ回路を切り拓いたといえるであろう。

第三章 Frederick M. Irvine による「ルネッサンス都市からアンジャン・レジームの中心都市に」 *From renaissance city to ancien régime capital: Montpellier, c.1500-c.1600* は、15世紀中葉までレヴァント貿易で栄えたモンペリエが、港の衰亡と、折しも同時期に始まった国王の司法・行政機構の拡充とともに、16世紀の間に商業都市から行政の中心地へと変貌していく過程を取り上げている。徴税簿や結婚契約書にみる持参金の額から国王官僚がその数と富を飛躍的に増大させ、また市政の場でも商人の独占を打破して権力を掌握していく経緯を追っている。しかし、商人から国王官僚への富と権力のこの移行が、都市社会全体にどのような変化をもたらすのか、あるいは国王官僚の都市行政への参加がどのような動機と方

法によってなされたのかは説明されないままである。

その点、第四章の James R. Farr の論文「ディジョンの消費者・商業・職人」*Consumers, commerce, and the craftsmen of Dijon: The changing social and economic structure of a provincial capital, 1450-1750* は、より広く、またより長期にわたるディジョン社会の変容に迫って読みごたえがある。1464, 1556, 1643, 1750年のタイユ税の徴税簿というきわめて良質な史料群を掘当てた彼は、これに巧みに問題を投げかけ、都市社会の変化の相をダイナミックに描いている。まず、地方行政の中核であると同時に商業の中心地であるディジョンでは、貴族、官僚、専門職とともに商人もその数と経済力を増大させ、彼ら富裕者との他の住民との経済的格差を広げていく。しかし他方で、周辺農村部をも経済的に支配する都市への一層の富の集中は、広範な消費物資、サービスへの要求を生みだし、とりわけ17世紀後半から消費性向に顕著な変化がみられた。それは、職種の増加、奢侈品産業の隆盛、繊維産業の周辺農村への流出といったかたちで、職人の世界に再編を迫り、彼らの経済的地位の向上をももたらす一方、一家の主として課税能力をもつ女性の数も著しく増大させたという。ここでは、Descimon や Irvine の論文の中心にあった支配層内部の対立や交代への関心は背後に退き、かわって職人や女性に目を向けることによってすぐれて経済活動の場である都市社会の、またその周辺農村との関係の変質が浮き彫りにされてくる。三世紀にわたる政治的・経済的变化に、消費性向の変化という媒介項を加えた点が、最近の研究動向を反映しているといえるであろう。

Farr が都市史研究の常套的な方法を最大限活用し社会の変化をトータルに把握しようとしたのに対し、第五章 Claire Dolan 「一六世紀エクサンプロヴァンスの職人」*The artisans of Aix-en-Provence in the sixteenth century: A micro-analysis of social relationships* は、同じく職人を対象としながら新しい方法的アプローチを試みており、刺激的である。住民を抽象的カテゴリーに分類し数量化した上で人口動態や経済的、社会

的、あるいは政治的行動を分析しようというのが現在の都市史の方法であるが、個々の住民が生を営んでいる社会的紐帯の複雑な様相を照射するには限界があると Claire は訴える。異なる職種間の行動様式の差異を把握しようとする彼女は、ここで次のような方法を提唱する。「系の歴史学か、ケース・スタディか」という二者択一ではなく、統計的基礎に立ってエクス社会のパラメーターを押さえた上で、その部分に微視的検討を加えること。「微視的分析」 a micro-analysis と名付けたこの方法は具体的には、現代の結婚写真を眺めるように結婚契約書と遺言に姿を見せる親族、同僚、友人関係を織工、すき毛工、皮なめし工、仕立て屋、靴職人、左官の別に検討し、社会的紐帯のパターンの相違を析出する息の長い作業となった。その結果、これらの職種の間には配偶者の選択、つまり親族ネットワークの作り方から居住パターン、家業の相続や新参者の受け入れ方、コンフレリの位置づけなど驚くほどの差異が認められた。換言すれば、職を同じくする同士が自分たちの一体性、共同性を保つその方法に多くのバラエティがあるということになろう。これまで「職縁的結合」という言葉で同職者の紐帯を一律にくくってきたことに大きな反省を強いる結論である。同時にこの研究は、都市と周辺地域との人的、商業的交換関係の具体相を生き生きと浮かび上がらせてくれた。たとえばエクスの場合、左官は同じ村の出身者であり同郷者集団の性格を兼ね備えていたように、都市は周辺部との間に人の移動の恒常的ルートを幾つも持っていたことが示される。都市を外部世界に開かれた存在と捉える視点によって、はじめて内部の紐帯の在りようを十分に理解できることを教えられる。

第六章 Robert A. Schneider 「王とトゥールーズの市参事会職」
Crown and capitoulat: municipal government in Toulouse 1500-1789 は、
トゥールーズにおける王権と都市参事会の関係をアンジャン・レジーム
の全期にわたって追っているが、表面的なスケッチに終わっている。

第七章は、René Favier による「経済変動、人口増加とドーフィネ小都市の運命：1698-1790」 Economic change, demographic growth and the

fate of Dauphine's small towns, 1698-1790 である。18世紀の経済成長と都市の発展の関係を探ったこの論文は、他の論文のように一つの都市をフィールドとして選ぶのではなく、ドーフィネ地方全体の都市を一つのネットワークとして問題とした点でユニークである。この地方では18世紀の初頭には10の都市が認められていたのに対し、世紀末には21の都市が数えられているという。この間、都市のメルクマールが伝統的な行政、宗教の中心地から人口の多さと商業活動に転換し、「都市なるもの」の認識に変化が生じているという指摘は興味深い。このように質、量ともにドーフィネの都市に変化をもたらした要因として、軍事環境の改善、農業生産の向上、新しい道路網の整備と並び、筆者は商工業の発展を最も重視する。しかし、伝統的都市に比べて高い人口増加率を示す小都市群も、その内部に立ち入れば依然として農業的要素を色濃く残し、都市的な社会的紐帯の形成はいまだ認められないという。この点の解明は今後の課題として残されていよう。